

# 濱口義信教授退職によせて

現代社会学部 現代こども学科主任

笠間 浩幸

濱口義信先生は、筑波大学大学院体育学研究科を修了され、四国学院大学で5年間教鞭を執られた後、1986年4月より本学短期大学部の助教授としてご着任されました。以来33年間にわたり本学の教員として学生の教育・指導、様々な学内運営、そして研究活動に邁進されてきました。この間大学は、2000年4月に短期大学部が改組されて現代社会学部「社会システム学科」が誕生し、先生は教授へご昇任。さらに2004年には同学部内に、現代こども学科が立ち上がり、ご退職の時まで所属されました。この新しい学科の立ち上げ決定時、先生はウェールズでの国外研究のさなかにあったとのこと。遠い異国の地から新学科への新たな抱負を抱きながら帰国されたというお話を伺いました。当時、私を含めて全国各地から集まった現代こども学科の教員11名は、新しい環境のもとで多岐にわたる課題に取り組まなければならない、濱口先生はそんな私たちの大きな牽引車となって導いてくださいました。まさに「生え抜き」としての濱口先生は、実に心強かつ頼もしい存在でした。また敬虔なクリスチャンであり、同志社愛に満ちあふれていた濱口先生の一言一言は、学生指導の場面においても、そして一教員として大学で働く身としても、深く心に染み入るものばかりでした。「一人一人を大切にすること」「常に本質的な問いを發し続けること」「相手を思いやり、感謝を忘れないこと」、これらのことを私は様々な場面において先生から教わりました。

濱口先生はまた、「柔の道」にも通じておられました。単なる勝ち負けではない心身一体となった人格形成の在り方と、それを人に伝えていくことの大切さを先生はまさに身をもって体現されていたものと思います。柔道は、日本発祥の武道として初めてオリンピック種目として採用された競技でもあり、日本の伝統的な精神性と国際スポーツとしての概念をどのようなものとして再構築するかは大きな課題であったと伺いました。濱口先生が人間形成におけるスポーツと体育の現代的な意義の探究をライフワークとされていたことも、この様な背景があったものと推察します。そしてまた何よりも、人がそれぞれの発達段階に応じて喜びや楽しみを共有する運動やスポーツの素晴らしさを、子どもの時から経験することの大切さを強く説いておられた「こどもスポーツ論者」としての先生を忘れることはできません。

個人的なことですが、私が関西一円の大学との連携のもと取り組んだ、須磨海岸での親子砂遊び「プレイフル・サンドアート」の開催初年度に、濱口先生はお孫さんと一緒にご参加くださり、「とてもよいプログラムで、こういう活動こそ大事です」とおっしゃってくださったことは、とても大きな励みとなりました。その後10年ほどこの事業を続けることができたのも、先生の言葉が私たちの自信と確信につながったことによるものと感謝しております。

本当に、様々な形でお力をくださった先生に、今改めて心からの御礼を申し上げるとともに、これからもますますのご健勝をお祈りいたします。

濱口先生、長い間、本当にありがとうございました。

